

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20730490
 研究課題名（和文） 就学前施設における外国籍幼児と外国籍保護者に対する保育実践の開発研究
 研究課題名（英文） Research of the Development of Childcare to Foreign Children and Their Parents at Preschools

研究代表者
 管田 貴子（KANDA TAKAKO）
 弘前大学・教育学部・講師
 研究者番号：10455727

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、わが国の外国籍幼児に対する保育の課題や保育方法、保育者と外国籍保護者との連携方法を、米国のマイノリティの子どもに対する保育を参考に明らかにすることである。

米国の「文化的に敏感な教育」（culturally responsive pedagogy）から、保育者は個々の子どもの文化的背景に合わせたカリキュラムや保育方法を選び、評価する必要性が指摘された。

また、米国では保護者はボランティアとして日々の保育に参加し、国も保育者と保護者とのコミュニケーションを援助するための手引書を作成しており、わが国の課題が示された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to clarify the methods and the problems of childcare to foreign children and how to go into partnership with their parents by referring the childcare to minority children in America.

By referring “culturally responsive pedagogy” in America, it was clarified that preschool teachers needed choosing the curriculums and the methods and evaluating childcare in consideration for children’s background.

Parents participated in daily childcare as volunteers at preschools in America. Also American government published a handbook for the communication between preschool teachers and parents. These points were important for preschool teachers with foreign children in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	300,000	90,000	390,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：保育、就学前施設、外国籍幼児、外国籍保護者

1. 研究開始当初の背景

わが国では、多様な文化的背景をもつ幼児の幼稚園・保育所への入園にともない、「多文化保育」や「共生のための教育」について研究がすすめられている。しかし、現状としてこのような幼児の受け入れにともなって生じる課題は残されたままである。

これまで、外国籍幼児の園生活への適応過程を、保育者と保護者の認識の変化もくわえながら、明らかにしてきた(管田, 2007; 管田, 2006)。そのなかで、保育者は集団保育場面における外国籍幼児への個別対応や、外国籍幼児と日本人幼児との関係づくりにおける援助の必要性に気づきながらも、十分に援助しきれない実態があった。すなわち、他児との違いが見えなくなるような同化を求める傾向が見られた。

そこで、わが国の外国籍幼児に対する保育方法を検討する上で、比較的早くから移民問題を抱えた米国におけるマイノリティの子どもの保育に関する研究は参考になるだろう(山田, 2006)。米国において「補償教育政策の一環として導入」された就学前施設であるヘッド・スタートでは(添田, 2005)、多様な文化的背景をもつ幼児が多く入園している。そのため、ヘッド・スタートでの保育や保育者と保護者との連携の方法を明らかにすることで、わが国の保育のあり方を検討するための知見を得たい。

引用文献

- 管田貴子(2007) 外国籍幼児の園生活への適応過程に関する研究 学位論文(広島大学)
- 管田貴子(2006) 幼稚園教諭のもつ外国籍幼児への期待に関する研究—中国人女児の事例から見えてきた課題— 乳幼児教育学研究 第15号 25-33
- 添田久美子(2005)「ヘッド・スタート計画」研究—教育と福祉— 学文社
- 山田千明編著(2006) 多文化に生きる子どもたち 明石書店 3-6

2. 研究の目的

本研究の目的は、わが国の就学前施設における外国籍幼児に対する保育の課題や具体的な保育方法、保育者と外国籍保護者との連携の方法を明らかにすることである。

米国においてマイノリティの子どもに対す

る保育実践と、わが国の外国籍幼児に対する保育実践とを比較、検討することで、わが国の保育の課題を明らかにし、外国籍幼児に対する保育方法や保護者との連携の方法を試案する。

3. 研究の方法

2008年度は、ヘッド・スタートに関する文献研究を行った。また、カリフォルニアにおけるヘッド・スタートの研究会と、ヘッド・スタートの保育者と保護者が集まる保護者会に参加することで、保護者と保育者との連携のあり方を探った。

2009年度は、マイノリティの子どもに対する保育に関する文献研究を行った。さらに、カリフォルニア州でマイノリティの子どもの保育を行っている幼稚園・保育所を訪問して保育参観を行い、保育にあっている保育者や園長にインタビュー調査した。

4. 研究成果

(2008年度)

ヘッド・スタートに関する文献研究から、ヘッド・スタートでは子どもの知的技能の基礎を教育する以外に、健康や福祉にもはたらきかけるトータルケアを行っており、そのために保護者の保育参加に重きを置いていた。家族との連携の考え方の基には、ブロンフェンブレナーの「システムモデル」があった。

わが国への示唆としては、日々の保育に保護者がボランティアとして参加し、それによって保育者・保護者がパートナーシップを形成し、子どもに良い保育・教育を与えようとしている点であった。保育現場では、保護者が様々な方法(保育の補助、教材の作成、特技の披露など)によって、ボランティアとして参加していた。保育者と保護者がコミュニケーションをとる姿を見て、子どもたちは安心感をもつ。さらに、保育者は保護者をエンパワメントすることも意識していた。

また、米国では国が、保育者のコミュニケーションスキルを向上させ、保育者と保護者との連携をサポートするための手引書を出して、保育者を援助していた。

(2009年度)

カリフォルニア州のある高校に隣接した保育所の保育者へのインタビューによれば、10代の母親の勉強と子育ての両立を、保育者は手助けしていた。英語が話せない親子も多

いため、週に1～2回は通訳者が訪問して、保育者と保護者のコミュニケーションを援助していた。また、10代の母親が保育者に心を開くには、時間と保育者の努力が必要であり、通園する親子と似た文化的背景をもつ保育者が積極的に採用され、活躍している点に日本との違いが見られた。

カリフォルニア州で年に1度開催されるヘッド・スタートの研究会および保護者会では、保護者がそれぞれの特技（歌、踊り、詩の朗読など）を活かしたボランティアを積極的に行っていた。保育者と保護者や保護者同士のつながりを、活動や会話を共に楽しむことを通して、深めようとしていた。また、保育者は就労や就学のために忙しい保護者に、毎日少しの時間でも親子の時間を作ることの大切さを伝えたり、ヘッド・スタートは貧困家庭を対象としているので、玩具を買わなくても、親子で楽しみながら遊ぶ方法を伝えていた。

さらに文献研究を進めるなかで、米国で行われている「文化的に敏感な教育」(culturally responsive pedagogy)と教員養成に着目した。すべての子どもたちが肯定的な文化的アイデンティティを発達させるため、多様な文化(民族的・能力的)や子どもの家族構成に合わせた教材・活動を取り入れることや、教師自身が文化の違いを尊重する態度をもち、子どもたちがもたらす文化的な資源を、教授・学習過程で取り入れることに熟練している必要性が指摘された。

加えて、保育者は(1)子どもが歓迎され、違いを認められていると感じる安心できる保育環境をつくること、(2)カリキュラム・教授方法を、子どもの「関心」や「好む/避ける話題」、「学びやすい方法」といった個々の特性に合わせることで、(3)子どもの目線で保育の評価を行うこと、の重要性が指摘された。

すなわち保育者は、個々の子どもが保育現場にもちこむ文化に対して敏感であり、「環境づくり、教授、評価」のそれぞれにおいて、それらの文化を考慮することが求められる。さらに、個々の子どもの学習スタイルの背景には、その子どもが所属する文化的要素があることを踏まえて、保育にあたらなければならないことが示された。

(まとめ)

わが国では、多文化保育やアンチバイアス・カリキュラム(偏見予防教育)に関する研究が進められ、保育現場にも紹介されてきた。しかし、これらの知見が保育現場で十分に活かされているとは言いがたい。その背景には、多文化保育やアンチバイアス・カリキュラムを実践することは、少数の子どもたちのために新たな教育を行わなければならない

いと保育者に感じさせ、多忙な保育者の負担になることや、子どもの日本語習得によって、保育の問題は解決したと保育者が錯覚してしまうことがあるのではないかと。

どの子どもにとっても居心地がよく、歓迎されていると感じられる保育環境をつくるには、多様な文化(民族的・能力的)に応じた、柔軟に保育を変えていける保育者の能力が求められる。そのため、米国で行われている「文化的に敏感な教育」は、新たな活動をするのではなく、日々の保育を保育者が見直す視点を取り上げている点で示唆的である。これは、日本の保育者にも取り組みやすい視点であると考えられる。

また、保育者と保護者との連携では、わが国においても、保育者は日々の保育に保護者が気軽に参加し、活躍できる様々な方法を準備することや、保護者自身もボランティアを通して潜在的な能力が引き出され、エンパワメントされることを意識して、連携していくことが求められる。

わが国の課題として、保育者が集団保育場面における外国籍幼児への個別対応や、外国籍幼児と日本人幼児との関係づくりにおける援助の必要性を感じながらも、十分に援助できずに葛藤していることがあった(管田, 2006)。この点でも、保護者によるボランティアを活用することで、保育者は個々の子どもへより細かな援助ができるだろう。

さらに米国では国が、保育者のコミュニケーションスキルを向上させ、保育者と保護者との連携をサポートするための手引書を出していた。現場のみに任せるのではなく、政策として国が外国籍幼児の保育を援助していく取り組みが、わが国の今後の課題と言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

管田貴子、ヘッド・スタートにおける保育者と保護者との連携、弘前大学教育学部紀要、査読無、第103巻、2010年、pp.111-117
http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10129/3402/1/BFEduHiroasaki_103_111.pdf

[学会発表] (計2件)

- ① 管田貴子、「文化的に敏感な」保育に関する研究—保育者の役割と環境づくりから—、日本保育学会第63回大会、2010年5月22日、松山東雲女子大学

- ② 管田貴子、ヘッドスタートにおける保育実践に関する研究－保育者と保護者との連携を中心に－、中国四国教育学会、2008年11月29日、愛媛大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

なし

[その他]

管田貴子、海外レポート「カリフォルニア州の保育者からのメッセージ」、日本保育学会会報、No.147、2010年、pp.8

6. 研究組織

(1) 研究代表者

管田 貴子 (KANDA TAKAKO)
弘前大学・教育学部・講師
研究者番号：10455727

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし